女學雜誌

第二百七十三號
明治二十四年七月十一日發兌

英國女子大學實況
婚姻論
第一章 遺恨百年
我が子、人の子 母

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 273 JULY, 11TH. 1891.

EDITORIAL :—On Marriage.
No. I. Two Pathetic Stories.

CHANCE THOUGHTS :—Faith in Friends. An Explanation. My Child, Another's Child. (A Mother.)

CHILDREN'S COLUMN :—"Little Lord Fauntleroy." (A Translation.)

NOVELS :—"Imawa Mukashi." (Hisago.)
"Nagare no Ashi." (Zekushi.)

MISCELLANEOUS :—Queen Among Female Colleges in England.

CRITICAL NOTES :—

CONTRIBUTED ARTICLE :—

NOTES AND NEWS.

QUESTIONS AND ANSWERS.

CONCERNING WOMEN.

第二百七十三號目次

社説 婚姻論（第一回）遺恨百年

隨感 友の眞實（しのぶ）●辨解（もみぢ）●我が子、人の子（母）

兒籃 小公子（第六回、戊）（若松しづ子）。

小説 今はむかし（ひさご）●流れの葦（二節、かつら）（是空子）。

雜錄 英國女子大學の女生

批評 近時政論考（井上次郎）●希望（撫象子）●世界最大のもの●約翰傳證據論。

寄書 荒砥なみ子●われは住む何の爲めに（香雪女史）

事

問答 數件。

女報 さま〴〵

週報

物價

第三回夏期學校

愈來ル十七日ヨリ開校ス
校費一二十錢 宿費一日分十七錢
委員上領純一箱根驛旅宿石内彌平太方ニ在リ入校者ハ就テ申込マルヘシ

新版書籍大賣捌
（女學雜誌社）

●木村駿吉君著
女學校用新編小物理學 上製價六十五錢郵稅六錢 並製同五十錢郵稅四錢
右新書本社にて大賣捌致候に付地方注文へは無郵稅にて定價のまゝ需めに應ずべく候。尙ほ此書は女學雜誌二百六十七號にて細評致候に付一覽ありたく甚有益の書と信じ申候

雅俗諸躰 作文口授 全
鈴木弘恭先生口述
一名國文敎科書
此書ハ大八カ各學校ニ於テ實地ニ授業シタル者ヲ筆記シタルナレバ國文ノ作例ハ勿論許多ノ熟語ヲモ擧ラレタリ此書ヲ一目セバ如何ナル初學ト雖モ消息記事論說諸躰ノ雅文ヲ立所ニナシ得ラルベシ諸君速ニ購テ試ミ給へ
出版所 神田美土代町四丁目五番地 敬文堂
賣捌所 麴町下六番町六番地 女學雜誌社

女學雜誌大安賣
第百號より、第二百號に至る迄、欠號なく調ひ居るもの多少有之候まゝ百卷をば僅に二圓五十錢にて前例の如く賣拂ひ可申候、其后欠號を生ずる分八十冊にて金一圓の割にて相そろへ賣捌可申候但何れも一と通りづゝ買入を要す。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百七十三號
明治二十四年七月十一日發兌

社説

婚姻論

（第一章）遺恨百年

社の友某女史、或る地方に道を傳え居たるが、近頃ろ思はざる出來事ありて俄かに京に歸りぬ。試みに其あらましを記るして、吾人が何如に切に婚姻の論に思ひを密むるかの由縁を示さんとす。

其地方に名高き豪家あり、家巨万の富を蓄はへ、權勢思ふかまなり。男子なくして孃二人あり、長なるは既に婿を取り。末なるを將に他に嫁らせんとす。末の孃、何と云へるは、多年深き窓の内に侍かれて、外出したると稀れなり、但だ文明の時勢に連れて、幼けなき比ろ、鄉の小學校には通よひけんが、年頃に近づきてより、學びの爲めなりとも容易すく閫を超ゆると能はず、友の語らふべきものなく、師の敎を聽くべきものあらざりける。たゞ女學雜誌毎日曜日毎に此處に來り、綠竹茂りたる奧深き部屋に獨り鬱しがちなる彼の憫れむべき孃を慰さめ、之が唯一の友となりて、朝夕打かたらひける。孃が心の底の言はざる感じは、たま〳〵紙上欄外に書入れたる折々の評言によりて知らる。而して、之を知るものは、たゞ彼處に配布されたる一部の女學雜誌、彼女自身のみにてありき。

或る時は、ブルータスとポルシアとの潔ぎよき愛の交りを讀みぬ。又或る時は、木村長門の守が其賢夫人より受たる血涙の文を讀みぬ。嘗ては、理想の紳士、理想の佳人を想ひ思ふて坐ろに無限の幻影をつくり、暫らくして「日本の家族」の冷〳〵たる所以を覺り、來し方、ゆく末を胸に滿たして、涙を拂ふ夕暮もありける。

或日、義兄は他より欣々然として歸り、妻と母とに告ぐる所ろあり。母と妻と皆な打笑みて喜こぶ。何事の幸福か、更らに此の巨富の屋上に落下したる。

母は、孃を招き、常になく寛ろぎて坐らせ、半ば笑みつゝ語り出るやうは、御身ことし既に二八を過ぐ、婚期正に熟し、日夜月下氷人の來迎を待つ、母が苦心何ものか及ぶべき、天

幸ひにして吾祈を嘉納し、近ごろ、云々の良縁に會せ玉ふ、聞ねかし、其家の富、吾が家に優るとも決して劣るとなし、家族は左程多からずして、姑も格外に六かしき人物にはあらず、相手は今年二十有五にして容色人なみにてはあれど、利巧にして當世風なりと云へり、吾家もし之と姻を結ばゞ、當一國の富の權は吾等が親戚にありと云ふべし、榮光限りなきとにはあらずや、あゝ御身は幸多き兒なる哉、たとひ生れて此の富める家に育つとも、若し之よりも低き家に嫁ぎて、慣れぬ仕業に手を下さんとせば、御身は俄かに落ちて貧窶に窮困するに均し、然るを今ぬ移りて一きは富める家に登らんとす、御身勞せずして一朝萬金を益するに同じ、御身の幸運の羨やましさよ、事情斯の如し、固より異議のあるべきならねど、寸刻も早く知らせまほしく、先づ之を告ぐるのみ、結納は吉日を撰みて何の日とし、輿入は秋の取實を待つて、來る某の日となさんとす、御身は今后すでに人の娶なり、つゝしみて身じまひし、女のたしなみを畧し玉ふと勿れ、と。

孃は打伏して首べを擧げず、身を震はして袂を花の顔ばせに當つ。母は思へらく、若き人の恥ぢらふとよと。獨りごち、打ほゝゑみて立つ。

暮色あまねく、行燈は、光を増す。孃は窓に憑りてつくぐ〵と庭の面てを眺め、虫の聲に哀れを添え、木の葉の音に心を寒ふす、古人を想ひ起せば、理想の光燦爛たり、將來を望めば、前途の光景悠遠なり。遂に決す、妾は道を守らずんばある可らずと。

先づ姉に告ぐ。姉は己が境界を述べて、女は兎角辛棒すべきものと教ゆ、世上の事女不情の心のまゝならんと思ふは空恐ろし、幼けなくして我儘を制せよとの家訓を學びたるは則ち是なりと答ふ。斷じて、兄と母とに傳ゆるとを肯んぜず。反りて之を止めんとす。孃は則はち意を決して母に告ぐ、母は悲しみて泣く。兄に告ぐ、兄は洪然として怒る。

地に泰平を出さん爲に我來れりと意ふなかれ、泰平を出さんとに非ず、刄を出さん爲に來れり、夫れわが來るは人を其父に背かせ、女を其母に背かせ、媳を其姑に背かせんが爲めなり、人の敵は其家の者なるべし。あゝ、一人道を確信す、之が爲めに家を亂すの狀察すべき哉。彼の家爾后の亂騷は、正に讀む人の想像に任す。

孃は云く、彼の家の男子は放蕩にして酒に耽る、世の爲めに力を盡さずして但だ己が事を爲す、之れ第一に心の合ひがたき所ろなり、亦た妾は未だ嘗て彼を知らず、彼れ亦た妾わを見ず、但だ家の富と富とを比較して相婚せんとせば、無乃、初めより賃金をして婚せしむるに若かず、妾わは己が敬愛する所の人に仕へんとを欲す、すでに人に仕へんとす、其人の貧しきと富めるとを問わず、亦妾わは、不肖なる妾自身を愛するの人に合はんとを欲す、未だ妾を見ず、たゞ妾わが家と家の富とを知りて之を娶らんとするは、是れ妾わを愛するの人にあらず、妾わが良人にはあらず、と。

孃は謝す、母よ、願わくは御心の痛みを取去り、妾わを以て徒らに我儘を言ふと思召し玉ふとなかれ、妾わは富みたる人に嫁して一生を不幸にし、面てに憂鬱の相を現わして幾久しく母の心を雜ませ奉つらんとを憂ひとす、かくて万一彼の家の風に合ふと能はず（否な合ふとを欲りせず）突然去られて再たび膝下に歸り來らば、當時、母の心を苦しませ奉つらんと何如斗りぞ、願わくは、今の暫らくの逆らひを許し、終生御心を慰さめまつるべき良緣に合はせしめ給へと。

かくて孃は意を決し、斷乎として答へける、妾は死すとも不當の家に行かず、愛なく、愛せられずして不當の家に行くは不正なりと。則はち食を斷ち、數日食ふとなし。

社友某女史、其地を去る五六里の或る鄕にあり、此慘話を傳へ聞きて棄て難きとに思ひ、或日自から行きて彼の家を訪ひ先づ孃に會ひて慰さむる所ろあり。次に、兄に。次に、母に懇ごろに信ずる所ろを述べて、勸めたりと云へど、人々固執して聽かず。他人の喙を容るゝに激し、ます／＼平ならず。唷に、母と兄との威權を以て之を婚せしめんとす。云く母兄の顏を立てずんばある可らず、一女妹の氣儘を許し置くと能わず、先祖親戚に對し申わけなかる可らずと。

止むとを得ず、女史は怏々として家に歸りぬ。數日后、彼の孃瓢然として脫し、數里の山を超え、夜歩して、女史が家に到る。云ふ、願わくは危急を救ひ玉へと。

兄は小僮數名を携さへ、尾して來り、理不盡に捉らへ歸らんとす、女史理を盡くして辨ずるによりて其儘去りぬ。翌る日亦た來り、暴を以て運行んとす。孃自から出てゝ至誠泣いて訴たふ、兄止むとを得ず、去る。孃、則はち一書を裁し、母に

三

送りて其のあるまじき外出の罪を犯せしことを只管らに謝し、兼て衷情を吐き、陳じて云はく、妾わ今ま母上の御心に從がわんことを欲すれど、眞心の諫め默止しがたく、此事の到底不孝に了らんことを信じて、今ま暫らく御心に背くとの反つて孝なることを思ひ、敢て恩愛深き膝下を辭ろひ奉りぬ、妾わ異日更めて母の御命を承わり、別ある家に嫁がんとき、身に添ふるものは一物もなしと云へど尙ほ甘んじ侍る、願わくは其に費すべき黄金の幾分を今ま惠み玉ひて、今後一二年の間だ妾わをして學ばしめ玉へ、斯て婦人たる務めを盡すべきの道を知り、而してのち母の新たなる御命に從わんことを期すと。

母此書を得ていよ〱怒り、嚴命して之を連れ歸らしむ。最後にいと嚴しき掛合あり、孃は遂に涙を揮つて歸る。左れど、彼の女史が盡力により、遂に彼の放蕩男子の許に行くべきことは止められ、異日孃が眞心に頷きて得心すべき人のあらん時迄で、緣談は斷えたりける。

左れど、女史を忌むこと太甚はだしく、之が爲め其地方の同志者を迫害すること屢ばなれば、女史は遂に彼地を去りて、先つ頃ろ都に歸りぬ。

右に記せる一話は、既に讀む人を感動せしめて餘りあるべし、左れど、吾人は尙ほ更に一つの實歷を附錄し、心に積れる、歎きを告白せざることを得ず。

社中の人の家に一と年餘り召使ひたる下婢あり、初めて來りし比ろは、純然たる田舍ものなりしが、其朴にして直ある處ろ何如にも愛すべくありし、家族打よりて道を談らふ時は、下に侍べりて之を聞くことを、何よりの樂しみとせり。後には夕餐了り、速かに水仕事の方を付けたるのちは、寸暇を竊みて、此の家に寄留する學生に高尙の談話を聞き、自から心を淸くするを以て最上の務めとはなしぬ。斯て、璞玉次第に光りを發ち、高潔の理想漸次に耳に入り、平素の覺悟自づと變化したり。

一と年にして、其父來りぬ。彼は村の物しりにて、村中の人より多少の尊敬を受け居る正直ものなり。下婢に言ひて云く、お前も既に十八となれり、番茶も出花に摘まずは、香ほり淡し、最早嫁入り時なり、隣村の何某は、昔し名主を務め、エライ人なり、其人の息子の何々殿と云ふは、利巧發明にして好く物が分り、戶長にもなれさうの人物なり、私が正直を見

こんで、お主の娘ならば好かるべしと推量し、お前を懇望せらる、一つ行つて見ては何如に、と。

下婢、(即はち彼が娘)は云く、爺よ、私は此家に來りて、少しは物の道理を知り、色々のお話しにて婚姻の大切なるとを承知しました、彼の人、私を見たにもあらず、私の心を知つてにもあらず、何ゆえに私を貰わんとせらるゝぞ、斯の樣に婚姻を輕ろんずる人は、末永く續くものにあらず、もし去られて歸りし時は、第一、あなた方の不面目にてはなき乎、と。

父は云ふ、夫は然だ、然し万事左樣に甘く行くものにあらず、仕方があければ歸つて來るのみ、心配のみして段々日を送るとも、復たび如此き良縁はあるまじ、と。

たとひ良縁なしとも、今の目前の談しを良縁とせずば、行くべきものには候はじ、一たん他に嫁せば、何如にすとも復歸らじ、故に行くに當りては十分に調べ、十分に考がへしめ玉へと、彼が娘は辨じぬ。

父は面倒らしき顔を以て、かく言へり、都に出ると、女は兎角六かしきとを言ふものなり、左程に恐ろしく思はゞ、近頃私が村などで流行る、「試み」と云ふとを爲すべし、假りに一月二月先づ行つて見るなり、若し好く合わば其后に式を爲す、もし合わずば其まゝ歸るなり、手數なれども、貴樣は先づ此仕方を執れと。

娘は戰栗して父の辭ばを止めぬ。

家の夫人出でゝ事理を辨ずと云へど、父は遂に了解せず、左れど、數日の猶豫を與へて去りぬ。

快活なる下婢は、之より沈默となりぬ、忠實に働らきたる下婢は之より靜滯せり、盖は、怠たるにはあらず、小止みなく、物を考ふるゆえなり、或る時は、夫人の前に出でゝ事理を聞き、或る時は、學生の室に行いて、其思ひの是非を質す、不風流なりし下婢は、時々歌を誦ひたり、主人が机上の讃美歌を取りて、口の内に試ろみたり、暫し鬱を慰さめんが爲めなるべし。

遂に斷決したり、不正の婚を爲さじ、不正の婚は、己が一身を誤まるのみならず、先方の人の一生を不幸にし、而して亦た己が兩親に歎きを來す、今の志ばらくの不孝は、即はち眞の孝なりと。

約の如く、父は再たび來りぬ、儼然たる娘が決答を聞きて、

彼れひと度びは驚ろき、又一と度びは疑がひぬ。我娘は斯る事を言ひ得べきものにあらず、必竟是れ他の入智慧なりと。疑心、暴斷を促がして、彼れ直ちに暇を請わんと云ひ、十日の后ち必らず連れ歸るべし、と言ひて去りぬ。

憫れむべし、下婢が顏ばせは、日に日に痩せ行けり、彼女は一層忠實に立働らき、仕殘せし仕事を皆な片付んとせり、洗濯もの、殘は悉く洗ひたり、足袋の綻は悉く繕ろひたり、勘定は奇麗に調べたり、書生がシャツのボタンの落ちたるを着け置きたり、縁り兒を思ふ存分に抱き試ろみたり、出入の人の所ろを一遍したり、毎夜〳〵、夫人に云く、奥さま、私が胸の團子は、日に日に一つ宛殖えます、と。

十日は、一日と立ちぬ。父は再たび來れり。彼女は、决して猥りに婚せずと云ひ、父は猥りに婚せしめず、兎に角一たん歸宅せよと云ふ。此の契約を以て、彼女は、一ヶ年間のホームを見棄て、粒々の涙を取つくろはず落し、鼻をくもらせて出で行きぬ。

以后一と月、未だ確實なる消息を得ず。

隨感

友の眞實

しのぶ

ダビデ、サウルに語ることを終し時、ヨナタンの心ダビデの心に結びつきて、ヨナタンおのれの命の如くダビデを愛せり。

と。是れ何等秀麗の一句ぞ。友の語らひは蜜よりも甘まく、花よりも美くし。而して世の人の此の樂しみを知らざるや久し。世の所謂る友とは、われに益を與ふるの人を言ふ。然り眞の友はわれを益する者なるべし。左れどわれを益するとは先づ吾を利するの謂ひにあらず、われ先づ之に與ふる所ろあり、われ能く之を與ふることを得るが故に則はち益を得るなり。所謂る益とはわが之を與ふるの益を言ふ。われ心より之を愛し、愛して其愛を現はし、何者をか犧牲にして他の爲に力を盡すことを得。其樂しみは万鈞の黄金又は天下の譽れを得るよりも樂し。

われに眞友あり、われ之が爲めに力を盡すことを得るを感謝す。其人を想ひ思ひ、潔ぎよき形貌髣髴として常に目前にあることを喜こぶ、あゝ友よ、君にあらずば、何如でか我が衷心を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

知らん。滔々たる淺薄の人、わが切なる情けを寄するに堪へず。

○辨　解　　もみぢ

ワシントンの言はく、最とも力ある辨解は沈默にありと。己れ久しく此言を服膺すれど、わが行ひ未だ能くわが所望を辨ずるに足らず。思ふに至誠の倘ほ及ばざるなり。人屢ばわが眞意を誤解し、さま〴〵に惡傳す、われ其人を憫れむと共に亦た自己の聖ならざるを憫れむ。或人、ピチーを評して云はく、彼は自から辨ぜず、人をして自己を解釋せしむと。斯の如きをこそ眞個の大丈夫と云ふべけれ。

我が子、人の子　　母

去年はさほど苦にならざりし夏向の用意、今年は梅雨を大方晴るゝまで爲し果てぬ樣にて、倘さま〴〵心配するは何故ならん?。昨日はフト考へぬ、そは我等たゞ二人なりしホームに先頃客人の來まして、今年始めて夏に逢ひ玉ふ故ぞ。かくて我等のホームは始めて滿員となりたるなり。始めてまとの家族を作しつるあり。さて一歳に足らぬ幼子の單衣は何が好からん、夏帽子はいかなるが似つかはしきなど、母心の忙がはしく、人に問ひもし、また人の子の着たる被ぶりたるなどに拔眼なく心を留むるもおかし。避暑に行かんには麥藁の帽子こそ好けれど、滊車の上にて見しものより心付き、さて昨日とゝのへし品々前にならべて赤き「リボン」の結び樣に餘念なかりし折、吾夫の他より歸り來まして、築地まで所用あれば共に來よとぞ。所用ありとも吾夫と連れ立ちて、外出するなどはいと〴〵稀なれば、何となく悟し。仕度もなしあへず、ともあはれ行けり。さてある外人を訪ひ、用事を果し、吾夫はそれより別れて高輪へ行き玉はんとす。わらわは家路に向はんとする時、吾夫時計出し玉ひ、始めて午近きに心付き、午飯の頃に人を訪は憚ぞとて、近きあたりの料理店にともども誘ひ玉ふ。家に在りて日々ともに膳に向ふとは何となく趣むき異なり、新なる心地せられ、今朝訪ひし外人が風采の清よげに愉快なりしことども語りつゞけ、思わず打興じて、頓に食事も果たり。出る時夫は食卓に殘りしパン菓子などに心付き、云ひ玉ふは、此パン一切の乏しさにあたら人の生命の消ゆる者さへあるを、互みに愼む可は吝ならずや、これは兎に

角、持ちかへりて、誰にか與へ玉わずやと。價こそ拂へ、食うべ殘せしものなど包て持歸らんは余り吝の樣にて自づと鼻白む心地すれば、彼の人の顏見遣りて、笑ふに、尙まぢめにて理を說き玉により、止むとを得ず、紙に包みて、袂に入れ外に出づ。我夫はわらはの車見送りて、新橋の方に步み行玉ひぬ。さてわらはの車は數寄屋橋御門を過ぎ、麴町の方に向ひて、彼の安政年間、時ならぬ彌生の雪に時ならぬ紅葉の散りしてふ舊き跡を過りし頃、何れの工事塲に運ぶにや、赤き瓦載せたる荷車幾台となく引れ行くに逢ひしが、殊さらわらわの前なる一台に眼の止まりしは、引手の他に異なりて、あやしき故なりき。先に梶棒とりて、辛くも引行くは、十四五の女の子にて、力なげに掛け聲す。同じ音聲にていらへしかは、腰をかゞめて、推し行くは其母とも見ゆる四十路前後の女にて、先の小娘の弟ならん十二三の男の子亦之を助く。家族三人にて覺束なくも引くと見えし車の上には、三ツに足らぬ程の幼子、熱したる瓦の上に頭を橫たへ打伏したり。嗚呼！憐と見る間に、わらわの車は、行き過ぎて、はや四五間離れ去りたり。わらはの手は彼のパンの包の上にあり、歸りて與へんかと、躊躇らふ間に、又六間七間と行過ぬ、

車やさん……、……コレ……。鳥渡待つて、おくれ……、車屋さん

宛ら聞かざるが如き、車夫やう〳〵にして止り、

なんです？、

アノ車を御覽よ、アノ女と子供計りて引いてゐるのを、氣の毒じやないか、一寸遣り度物があるから、こゝへ來る迄休んでゐておくれ、おまへも其內一息つくが好いよ……、どふだへ、可愛そうじあないか。

同感を求めたれど、からき世にからきすぎわひするは、己れも異ならずとや思ひけん、たゞ無愛想に、

へイ……、

といらへて頻りに額の汗をぬぐひしのみ。さて暫らくいこひて待てども、引いては休み、休みては又引き、覺束なげに引來るなれば一寸にて追着かず、時を置き、細き掛聲の先づ聞ゆるのみ。かくてはもどかしとて、車夫に勸めて二三間戾れば、彼の哀れある家族は既に目の前にあり。午ははや余ほど過たれば、身に不相應しからぬ仕業する母、同胞らは固より、車の上なるか細けなる幼子も亦、ひだるからんに、ひだるき

に慣れてか、其まゝに寐ねたり。左れど投げかけたる細領、瓦に載せたる少さき双の手、無言ながら人の憫れみを請ふに似たり。此時、跡推しせし殊に弱れる母、小娘に代りて梶棒を取り、わらわの車が其前にとまりしに心得ぬ樣なりき。乞食ならぬに物與へんといはゞ、何とか思わんなど少し掛念して、顔の赤らむを覺へたれど、思い直して聲を勵まし、

一寸おかみさん！誠に失禮ですが、あの子に（車の上なるに指し）これを遣つて下さいませんか?。

突然さし出すパンを見、わらわの顔を見て驚きたる樣なる母は、丁寧に顔を下げ禮を述べて、之を受く、姉は白き歯を現はしてわらわの顔打守れり、わらわは言葉をつぎ、

ア、熱いに頭へ何かお被ぶせなさいましな、アノ手拭でも、毒ですから。

言葉を殘して、わらわの車は行過ぎぬ。此時つねよりわらわの物云の粗雜なりしを跡にて思へば、心の情にまけじと氣張りし故ならんか。家路さして急ぐ車、見し今を去らぬわらわの心、胸ふさがりて涙は眼に一杯におりぬ。われらは人の子に對するの務はおきか、嗚呼、變らざるは造化の愛と母の心、嗚呼、我が子、嗚呼！人の子。

兒藍

小公子。

第六回（戊）

若松しづ子

セドリツクは先づ食事を終りまして、椅子に憑れながらズット坐敷を見廻し升て、

どふも立派なうちですね、あなたこんなうちに居て、嬉しいでせう、僕、こんな立派なうち見たとがないんです、だけど、僕はまだ七ッにしかならないんで、たんと方々見たとがないんですからネ。

それて、おれが滿足に思ふだらうといふのか?。

エー誰だつて滿足ですは、僕だつてこんなうちが有ば、大威張ですは。どふも何でも、かんでも奇麗なんだもの、アノお庭だの、木だの、どふも奇麗だつたと、葉なんかが、ガサ〳〵音がして。

斯云つて、一寸口を閉ち、又何か云度そうに、向を見て居て、たつた二人切りにやア余んまり大き過ぎ升す?、どふてせ

う?。
二人の住ひにやア充分の樣だが、大き過るとおもふのか?、
セドリックは少し躊躇して、
僕はチ、考へてたんです、二人でも餘んまり中の好くない人が一處に居るんだつたら、時々淋しいか知らんと考へたんです。
どふだ、おれは一處に住むには好い合手だろうか?。
エーそうでせうよ、だつて、ホッブスおぢさんと僕は大變中が好かつたんですもの、僕は一番好な人の次にやア、あの人と大中好でしたもの。
侯爵さまは、急に眉をひそめて、
一番好な人とは、誰だ?。
セドリックは抵い靜かな聲で、
僕のかあさんのこつてす。
さて、いつも床に着く時は、近づき升し、それに二三日前からゴタ〳〵した所爲で、少し疲勞が出て來た樣でした。又疲勞を感じると共に、今夜からは、自分と一番中が好いといつた優しい母さんが側に守つてゐて呉れて、いつもの所で寢るのでないと考へては、何となく妙に淋しい感じが起つて來ました。セドリックは、これ迄年若な母とは親子と云わふより寧ろ中の好い朋友の樣でした。此時も母のとが思われて、仕方がなく、母のとを思へば思ふ程、話が仕憎くなつて來て、食事が終る頃には、さえ〳〵してゐたセドリックの顏に、薄く雲がかゝつた樣なのを、侯爵も氣がつかれ升た。併し勇氣は中々折けず、書齋へ歸る時にも、給仕が以前の一方へお附添ひ申しはし升たが、矢張片手はセドリックの肩に載つて居ました。たゞ最初ほど重くは有ませんかつた。給仕が御用を濟まして退つて仕まい、侯爵と二人になり升た時、セドリックは、毛革の上にダガルの居る側へ坐りました。暫時犬の耳を撫でながら、沈默て暖爐の火を眺めて居ました。侯爵は、眼をすへてセドリックを御覽じると、何か物足なさそうなのが、眼付までに現われて、頻りに考へてゐて、一二度ソット溜息をつきました。侯爵は眼を離さず、ジット見て居れて、軈て、
フォントルロイ、貴樣、何を考へてゐるのだ?。
と被仰ると、フォントルロイは氣を勵して、漸くニッコリ笑ひ、
僕、かあさんのと考へてたんです、僕………何んだか變て

すから、チットあつちこつち歩いて見ませう。
といつて立上り、小さなポッケットへ兩手を突き込んで、あちらこちらと歩るき始めました。セドリックは眼を光らせ、唇を堅く結んで居りましたが、首を擡げて、シッカリ〱歩いて居ました。ダガルは不安心といふ調子で、見て居ましたが、やがて立て、セドリックの居る方へ歩み寄つて、何か落着ない様子で、セドリックの行く方へ從いて行きました。セドリックは、片手をポッケットから出て、犬の頭へ戴ながら、
おまへ好犬だネ、僕の友だちだネ、僕の心持を知てるネ。
といひ升と侯爵が、
どんな心持がするんだ?。
此子供が始めて家を離れて、頻りに淋しがるのを見て、侯爵は快くは有ませんかつたが、併し又それを辛抱し遂せやうとしてきつくあつて居るのが、お氣に叶つて、幼ながらの勇氣を殊勝に思はれました。侯爵は、セドリックに向つて、
こゝへ來い。
セドリックは、直ぐと側へ行つて、例の茶勝な眼に、困つたといふ思わくを現はして、

僕はネ、一度もまだ餘處へ泊りに行つたとがないんです、始めて自分の家を出て、人のお城へ泊るなんていへば、誰だつて變でせう、ダケドかあさんは、そんなに遠方に居るんじやないんですからネ、かあさんが僕に、そのと覺へておいでつて、そういひ升たもの、それからモウ僕は七ッにあつたんだから……、アノそれから、かあさんが下すつた寫眞を見て居られるんですからネ。
といつて、ポッケットへ手を入れて、藤色びろうどの小さな箱を出し、
これですよ、ホラ此だぬをこう推すと、開き升よ、ソラ、中に居ましたろう!。
セドリックはズッと椅子の側へ來て、其箱を取出す時は、臂掛からお祖父様の腕に、いつも寄掛りつけた樣に心置もなく、寄掛つて居ました。箱を開けながら、
ホラ、居るでせう、
といつてニッコリ笑つて上を向きました。
侯爵は眉を顰められました、兎に角其寫眞を見るのは嫌に思はれましたが、我知ずチラリと見ると、マア云ふに云はれぬ

奇麗で若々くした顔が、そこから覗いて居て、其顔がまた、自分の側に居る子供に、余り生寫しの樣に似て居たので、ビックリされる程でした、

貴樣はお袋を大層好だと思つて居るのだろうな、

フオントルロイは何氣なく、優しい調子で、

エーさう思つてるんです、そうして僕本當に好なんだと思ふんです、あのホッブスおぢさんも、ヂックも、ブリヂエットも、メレも、ミケルも、みんな僕の友だちですけど、アノかあさんはマア僕の大變な親友なんです、そうして僕と二人はいつでも何でも話あいつこするんです、僕のとうさんが跡で僕に世話をしろつていつて入つしたんだから、僕は成人になると、働てかあさんのにお金を儲けるんです。

侯爵は、

何をして金を儲けるつもりだ。

セドリックは辷下りて、元の毛革の上へ坐り、手に件の寫眞を持ちながら、まぢめに考へて居る樣子で、暫くしてから、

僕はチ、ホッブスおぢさんと一處に商買をしようかと思てたんですがチ、どうかして大統領になり度とも思ふんです。

其代りに貴樣を貴族院へ遣ろうは。

といふお祖父樣の言葉を聞いて、

そふですチ、どうしても大統領になられないで、夫が好商買なら、夫でも好ですよ、万屋は時々不景氣でいけませんよ。

セドリックは心に今のことを考へ比らべて居たものか、それから大層靜まつて、少しの間火を見て居た樣でした。侯爵も何も仰しやらず、椅子に凴れて、セドリックを眺めて居られ升た。其間種々雜多な妙な考へが老貴人の心に浮びました。ダガルはズット四足を伸ばして、前足の間へ顔を突き込んで、眠つて仕まいました。暫らくの間、四方に音も有りませんかつた。

◆　◆　◆　◆　◆

半時間もすると、ハヴィシヤム氏は、案内につれられて、坐敷へ通て來ました。大廣間が殊に物靜かで、侯爵はまだ椅子に倚掛つた儘で、居られました。ハヴィシヤム氏が、お側へ近付うとすると、侯爵は手眞似をして、何か氣を付られましたが、夫が爲ようとしての手眞似ではあく、するとはなし、我知ずしたかの樣でした。ダガルはまだ寐つて居て、其大犬の直ぐ側に、ちゞれ頭を腕に凴れさせて、横になつてゐたのは、フオントルロイで、是も熟睡の躰でした。

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

今はむかし。

ひさご

下谷根津の近邊、某神社の祭禮、太平うちつゞきし頃とて、若き男は狂氣の如くはしりまはり、貌よき娘を花車練物の警固に隨へんと親々をそゝのかすに、こなたも心乘て種々の工風に我娘これみよと競わふ、用意おこたりなし、この社少しはなれたる所に狹隘なる家居しめてからく日をおくれる夫婦の中の一人娘、年は漸十六にて花はち月の光もけたるゝ計、容貌うるはしきにそひて、心ざまもやさしければ、昔物語の竹取もかくやと兩親めでかしづき、朝夕のまづしきもこがねにまさる子寶になぐさめて、蝶とめて、花といつくしむ掌のお玉といふ名は若男の掛にまづはかぞへ入られぬ。

七夕まつる竹にさや〳〵と夕風わたる音して、ほし合の空もくれかゝるうら口より、をば御うちか、と入くる男、鷲握みにしたる手拭に數度鼻と額の汗ふき、上り框に片安坐かきて、ホツト息をつき、今日ほどつかれし事はなし、されどいづれもときつけられて皆承知、こなたは如何にと斗では藪から棒、しらるゝ通りの今度の祭禮、隣町に劣ぬやう御殿風の想出立、趣向はすつかり決定つたれど、きまらぬは其役割、小性出立にするやうな娘に一人事を缺き、いづれをさがせど山家育ち、御玉杓子に目鼻斗と、相談しぬいたあげくの果、杓子の名から思ひ付いた御玉坊、御迷惑とは察してゐれど、向ふ横町の角屋敷で此間御部屋が死亡なられ跡役を穿鑿中、小性出立でおし出したら、しらぬ人なき器量よし、直に御目に止まつた上、お玉坊は玉の輿をば御は樂な御隱居樣、左り團扇で大あつや、玉の汗をかいですゝむるも、こなたの爲をおもへばこそ、水晶の玉でも珊瑚の玉でも箱入では價値がしれぬ、玉を抱いて罪つくられず、開帳するも功德の一ッ、とくと思案のついた頃、又出直してとひとんといそがはしげにはしり行。

納戸おし明て欠伸に躰を反らしつゝ立出づる夫、茫然としたる妻の顏うち見て舌うちおらし、殘らずかげで聞しかど、今こそ出世の好機會、娘の髮に引かれて再度世に出ん事、容易すし、我娘今日迄人に立交らふ事ゆるさゞりしも、かゝる時あらんを待ばおり、埋木には花咲春なく、しめゆひし花は折らんに便なし、この度の祭りに見事仕立てゝ出さば、彼角屋敷は

勿論、いづれよりも召抱へられん事まのあたり、とは思へども瘠世帯に其晴衣よき工風はなき事かと歎くを、女房はうちけして、物の用には鼻をも殺とやら聞ぬ、諸大名の家屋敷多き通りをお玉の晴着きておし出さんには、あたりの娘等はあつてもあきやうに、けなされ、芥捨場に鶴の一聲、殿様のおめにとまり召抱へられんは定のもの、その時をたのみにして、昨日口入婆の問はず語り或大名で抱乳母を欲しとたのまれしといひしを今思ひ出ぬ、給金は二年の前借、さきにわたしてもよしその事、しばしの不自由を堪忍びて、御身だに許し給はゞ、娘の爲少しの苦勞は親の役目よをわたつ海にさす舟の浮沈み多きよの中もこれよりは浮む瀬に漕出んさい先よし身を捨てこそかゝらめと囁き語るおもての方、仲間の聲とおぼしく、こゝの乙姫が出るので殿様はお待かねッ夫は叉ぬきし腕をしづかに解きてニッコとゑみ萬事は女房そちにまかせぬ。

明治女學校音樂會の收支報告
本號雜誌廣告の第一面に見ゆ

流れの葦

是空子

(二節)かつら

片鄙は道行く人も稀にて、稀に行く人も急ぐとなし。車屋の掛引は横鷹にして、客を數町やり過ごし、大煙草數服を拂ひ、股引をメ直ほして後ち稍やくに應ず。左れど一日の中に斯る喚聲を聞くと、確かに兩三回なり、耳の遠き茶店の婆も其は確かなりと保證す、聲の極めて大きければなるべし。仕事少なければ惰け勝にて、惰ければ徒食雜言多し。車輪の音は響かずして、談し聲、車坐の内より起り、婆が店先のお客は大抵いつもの車連なり。談しの途切れは、茶菓子の賣れ時にて、車夫が口は何れにせよ婆に損毛なけれど、只だ貸しの殖えて、金の取れぬは迷惑なるべし。

勸めに隨がひ、夏向は菓子の傍に、泡盛を置き、上戸下戸を一手に網せんと計る。客のかゝるとは少なけれど、客少なければ、店先の車は屯ろして、相應の賣口あり。但だ婆は此の車連の嫁も知り親にも知己なれば、貸の溜まるに隨がひて、苦情をこぼさるゝもつらし。「お前方ちつとお客を見付しやつさい」と言へば、「婆どん此あついにお客があつて溜るものか、

財布にどうで溜らないものなら、まあ腹の中に溜めて置くが増だんべい」と返答す。拔けたる齒は、泡盛機嫌の口と爭そひがたし、婆はもぐ〳〵として其儘默すこと多しとぞ。

京に田舍あり、京の田舍は田舍よりも鄙びたり。東都繁華の大道を距る半里にして、谷中の奧を入る十數丁に過ぎねど、風景人情忽然として都の衣を脫す。

樹木は新らしく裝ほひて青々とし、人はつゝれを着たれど自づと珍らし。玆に、褪めたるか、汚れたるか、進化退化の道行を判ちがたき鼠色の單衣を着、尋常に下を褰げて、足に草鞋を踏〆め、頭らにちと大きやかなる笠を冠りて、顏の全く覆はるゝを折々もたげ、大布呂敷をたゝみて猪首に掛け、手に有合ひの藪の枯竹を杖つき、巡禮にあらず、托鉢にあらず、旅人にあらざる、幼なき僧兒來りぬ。

眞中は遠慮するか、道の縁を通る。つゝしみて歩めど、塵を蹴上ぐるは足の重きゆえと知らる。休まず顧みずと云へど、折々振り向くは、やう〳〵にして來りし道程を數へんとにやあらん。一二町毎に頭らを擧げ、大笠の下より前程を望む。店はいづこ、家はいづこ。

婆が茶店の前を過るとき、特更ら遠慮して路を迂回し、車屋の面倒とならぬやうにす。足の疲れを察して、車夫は常になく早やすゝめかゝるとき、店の婆に挨拶せんとする樣子の見ゆれば、車夫はしばらく扣ゆ。

僧兒は、手を笠にかけ、躰をひねりて下より店を眺めたり。顏ばせ丸ろく、豐かに、目元愛々し。笠の紐にて〆たる口元に笑ひを含み、

今日は、お婆さん、今ま歸るんですよ。

一處懸命に蠅を追拂ふ婆は、團扇を大薙刀の如く揮りまはし、畜生！、パタリ、畜生！、パタリ、と拂へど、蒼蠅は去りがたく、飛んで己が禿げたる鬢の邊りに群がる、うるさしと頭らを振れば、齒の拔けたる頰の谷を平家の隱れ家と集まる。

今日は、お婆さん、……今ま……、お婆さん。

畜生！と、怒りて拂ひ廻り、此方を見て、俄かに地藏の如く、

ヲヽ、今ま歸らつしやるか、暑かつたらふ、ちつと休んで行つしやい、

刄を拭ふて、團扇を其まゝ差出さんとするに、

有がたふ、デスガネ、お師匠樣が、待どふがつて入つしやるで

せうから、今日はもう行升よ、また來升からチ、お婆さんも早くお仕舞なさいよ。

アヽ、デモ、マア、一寸休まつしやいナ。

早や涙ぐみて、鼻を動かすは、此の婆、年久しく彼の僧兒を知ると見えたり。

ホンニナア、婆どんが死なつてから、さびしからふナア、用があつたら、私にそう言わつしやいヨ。

いろ〳〵有がたふ、お師匠さまが親切なお方で、何も悲しいとはありません、お婆さん、あなたも隨分氣をつけて、たつしやでお出でなさいヨ。

アヽ、そうするよ。……モウ、行かつしやるか、おまへもよく氣を付しやつさい、またお出よ、よく氣を付しやつさい、あんまり水を呑んで、腹をわるくしない様に、わしも氣をつけるから…………

車連はくつ〳〵と笑ひ、

チイ、婆さん、もう行ちまつたがナ。

△アレハ、知恩寺の小僧だナア、何處へ行つたんだ。

○昨日、ナンデモ、田舍の旦那衆の所エ、使ひに行くつて通たつたが、今ま其歸りだらふヨ。

□知恩寺てへば、アスコに、廿四五の、小六かし相な、男が居るナア、ソラ、髯の一寸と生へた。

△そうよ、むつつりした、口をきいて損したてい様な奴か、

○全躰、あすこの奴等は皆なそうよ、あの住持な、あれだつて、人に言葉アかける處、見たとがねいぜ。

□だが、あの髯の生へた男ほど、偏屈な、變りもんは無いよ、何でも隨分學者あんださうだ、たゞ世の中が詰らねい〳〵言つて、死たがつて許り居る言んだ。お寺にやあもつて來いの男よ。

△あにか、それで坊主の養子にでもなるつて言ふのか。

□どふして、あの住持が、敎わる位ひだとよ、全躰今時の坊主はあてに成らんが、あすこの坊主ばかしは、本當に坊主らしいナア。

○夫れで、肴一疋買つたとがねいつて、此間、八がこぼしてた。

△チイ、熊はどふしたらふ、あんまり長エじやないか、無暗に客に尾いて行たんヂヤねいか、アイツにや困るぜ、餘

計ひつかけたから、客と喧嘩でもしやしないか、チイ、見ろ、向ふに、子僧子をつかめへて、何んだか、いちめてるぜ、ヨセばいゝに。

○ア、、何んだ、アレ、ひどいとをするなア、可愛相に、ヤ、アイツ、馬鹿目だな。

□チヨツ、馬鹿！、行つて連れて來ようか。

△ヤ、見ろ、例の偏屈ものじやないか、そらやり出した、馬鹿、よせば好に、ソラ、馬鹿アー、投られやがつた

不埒な奴じや、許さんぞ。

投げ出したる大の男の塵に埋もるゝを見つめ、躰を控え毅然として睨まへたり。威風堂々。駒下駄を踏〆たる両の足、黒金の柱の如く、風にひるがへる薩摩がすり、黄金の鎧よりも凛然たり。

ナ、ナンダトウ、己を投やがつたナ、サアー來い、喧嘩なら來い、己を誰だと思ふ、アイダヽ、此むらで熊つていつちやア人の知つた關取さまだ、鎮守の關取で負たとのない、力士さまだ、己は一躰ダだれだ、何ものだ。

默然として突立つのみ。傍に來りて手を出しかけるを、引下しに投げ棄てゝ起きかゝるを足にて蹴飛し、二つ轉ぶを更らに蹴飛し、韋駝天の如く暴れ、忽然亦た靜まりて冷々たり。

疑堂さん、どうぞもうかんにんして遣つて下さい、私も惡かつたんですから。

顧みて重々しき石像的の顏色に、ちとの温たみを發し、笑ひ、

怪我は無つたか。馬鹿なやつには困るナア。

仲間の車連二人來り、倘ほ起き還らぬ、熊を起して引行んとすれば、俄かに元氣を出し「サア、來い、己を誰さまだと思ふ」。塵にまみれたる唇より、塵を吐き吐き、わめく。

コレ、熊、ヨセツ。コレツ、ヨセツ。旦那、御免なせへまし。コイツ、醉ぱらつてますから。コレーツ、ヨセツと言ふに。旦那、御免なせへまし。

婆も、よろ／＼しながら來り、知空さん、怪我をしやつさらぬか、ホンニ、熊さんも熊さんだ」と言へば、熊は又々暴れ出し、「サア、來い、己を誰さまだと」……「イ、ヨ、旅公だからイ、ヨ、旦那、御免なせへまし」。

心配氣に見送り、我知ず元來し道を行かんとする知空を止め、

どうする?

と問われ、思はず氣づきてニッコリし、

お婆さんが、危ないといけないから送りませうか。

ヨカラウ、少しだから。サア行ふ。

疑堂は俄かに打とけ、知空が手を執りて行く。其足の重げなるを見て、物言わねど眉にしわ寄せ、其熱氣なるを見て、持て來し扇子を貸し、暫し止まりて笠の紐を取り遣わし、洋傘の下に入れて、左の手にて彼が手を引く。

巖ほは、細き流れにしめり、巨木はつたかづらに纏わる。心重き人は、無邪氣の幼な子を見る時こそ、唯一つの心遣りあれ。胸に万斛の懷疑を滿たし、頭らに千卷の哲學を雜えて、天地の理法愈々明らかならず、漾々たる道ます／＼隱れて、光明漸やく消ゆ。固より酒色を樂しみとせず、何を以て肉の慾に耽らん、譽れは夏の夕べの雲に似たり、美くしと云へど暫しにて消ゆるとを知る。愛は果して何ものぞ、之を解釋せんとして益々迷ふ。愛せらる、愛す、そも／＼何の現象ぞ、暗がつていよ／＼愛を知らず。万事空、天地一の大疑塊。左れど、無邪氣の幼な兒に接すれば、われ既に哲學を失なふ、われすでに懷疑を失なふ。心切にして容易ならぬ思ひあり。顧みればわれ既に愛あり。

ヤア、歸つたか、知空、大變、まつたよ。迎ひに來たのだよ。

頭らを擧げ、半ばあまへて、

そう、私しも、早く歸りたくつて、大變急いたのですが、足がくたびれちまつて。

そうだつたらう、もう少しだよ、今日大山さんがまた來てネ、お前を尋ねたヨ。

そう?、いつものお二人で、おツパもついて、ソウ、だれか水を酌んであげてツ。

夫れワ知らんヨ。

アナタ、お會ひなすつたノ。

イ、ヤ、面倒だから會ない、女は好かんよ、面倒で。

そんなとはありませんワ、大變親切なお方ですワ、此間は姉さまの方が、私に色々お聞なすつたの、アナタの事を。

私の事を、フン、何んちつた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

毎日何時にお起なすつて、いつ頃ろお休みなさる、御飯は矢張りお師匠さまと御一處か、運動は爲さるか、私しとお話しでもなさるかと云ふやうなと。

何の爲だらう、知りもせん人が。

大變心配して居らつしたから、アナタ、直にお會ひなさいませんかと言つたら、あのお方は人にお會ひなさるとがお嫌ひでせうだつて、何とか云ふアナタのお書なすつたものを見たつテ、そして私しに成る丈け度々、お話しを仕てお上つて、そう仰しやつたノ。

そうか、私はお前と話しさへすれば好い、今夜は一つ面白い談しをするよ。

そう！。

目をくる〳〵して疑堂の顔を見上ぐ。疑堂はにことして、

お前は私が好か。

知空は暫し考がへたり、切りに返辭を見出さんとして、

好つて言ふよりもまだ好ですワ。

そうか、それじやア、私に會ふのが好か。

會つてもまだ會ひたいやうですワ。

面白いとを言ふナア、ダガ、そんなに愛しても、互いに死ぬると思ふと詰らないナア、餘計愛して居る丈け苦しひじやないか。

知空は不審そうに、

私はそう思ひませんワ、死んでも亦た會れるでせう、それに死ぬまでゞも、愛して居るのは樂しひじや有ませんか。

そうかナウ、死んでも亦會れると思へると好けれど……

俄かに打沈みて思ひなやむ。知空は下よりのぞき、

それでも、死んで先に行つたんですもの、後から行く人はあへるでせう、私は死ぬより、別れる方がつらいと思ひますワ。

ナゼ？。

大哲學者も、此の玄妙なる眞理を質問せんとを欲す。

デモ、離れたら、會へないでせう、死んだら一處の所に居るじやアありませんか。

ムー、そうか、すれば、お前も私も早く死たいナア。

夫でも、お師匠さんを遺して行つてはお氣の毒ですワ、誰も御膳を焼たり、使に行く人がありませんもの、夫にア

の茶店のお婆さんに氣の毒ですし、大山さんのお孃さま
とも一所に行たいんですから

お前は大變慾が多いねー。

知空は俄かに心配らしく、

そうですか、慾ですか、慾なら、そんなには思いますまい
チー、夫じや私は一番あとから死んで、一人も遺さない
やうにしませう。

ソウサ、先づ夫が好からふ。

少なくとも、わが生き存らふ間は生きよかし、わが心遣りは
たゞ汝なれば也と、自づと哲學者の顔ばせは物言ひける。

雜録

英國女子大學の女生

準備

英國における女子教育の進歩は、因縁深し。蓋し一日の養なひにはあらざるなり。當十九世紀の初めつ方より、文運着々進み、教育の事次第々々に擴ろがりたれば、女子教育に心を掛くるものも漸次に増したりき。遂に一八四八(四十四年前)と云ふ年、教授モウリス氏は、チーヤレス、キシグスレー、などの助力にて、倫敦にて后にクインス、カーレーヂ(女王大學)と知られたる學校を建設すべきよりも官許を請ひ得たり。翌る年、即はち此校成り、併せてベッドフホルド、カーレーヂと云へるものも出で來にけり、之を英國に於ける高等女學校開設の最始となす。爾來、二十年、左したる女子教育上の進歩あらざりし如くに見えつれど、彼の兩校の卒業生は陰々に無育の感化を及ぼし、世上の人次第に女子教育を重んじ來り、水の下かげに幾屈の水集まりて、二十年后俄然滔々として流出する大河とはなりぬ。主も之に盡力したるは、ジョン、スチウワート、ミル氏。ミセス、ブローニン。メレー、ソマービル。ハリエット、マルチソウ、などの學士女秀才にてありき。

一八六七(廿五年前)と云ふ年は、女子教育上に大紀念を表すべき年なり。之より先き、エミリー、デビス孃一と方ならぬ盡力にて、カムブリッヂの大學が其地方試験と云へるものを、十二才乃至十八才の童兒及女生徒に施こし、及第したる者は、都に上り、カムブリッヂに入りて講義を聽くとを得るの仕組に爲さんとを欲せり。此の盡力漸やくにして多くの同感を世間に博し、此の一八六七と云ふ年、初めて右の地方試験なる者を行ふに、女秀才初めてカムガリッヂ大學に講義を傍聽するとゝなりぬ。而して、スチウワード、ミル氏が一千四百九十九婦人の同意捺印を以て、國會に女子政權授與の事を請求したるも亦た實に此年にてあるなり。之よりして長足の進歩年々に成就し、其翌る年はエミリー、デビス孃が手にてヒッチンに女子大學の基礎を置きぬ、此校後にカムブリッヂの道々、ギルトンに移り、今のギルトン女子大學校となりぬ。又、教授シヂウイッリ氏、此時女生の寄宿舍を設け、クラウ孃が監督の下に置きけるが、此舍更に發達して今のニウンハム、女子大學とはなりぬ。

寄宿

ニウンハム女子大學には、彼のクラウ孃今に至る迄で校長たり、グラッドストンの令孃、副たり。現在生徒一百四十人にて皆な校内に寄宿す、たゞ兩親と同居するもの、又は四十以上の齢らのみは、校外に宿するとを許さる。生徒の平均年齢は二十才乃至二十二才。之よりも少きはあれど、十八才以下の人は、特別の事情あるにあらずば、入校するを能はず。

取締

全く自由なるべし、否な嚴しかるべしなど、さま〳〵に取締方を想像する人あれど、其何れにもあらず、固より相應の取締方あり、左れど亦大ひに自由なり。夏の間は、午后八時を門限とし、冬は六時とす。之に後れて外出するものは豫て届け置き、十一時迄に歸校するとを要す、但し更に特別の届けあるときは固より構ひなし。又學生は、常に講義席に出で聽聞するとを要す。講義なき時間は好む所ろに出で遊ぶとを得れど、船をこぎ、馬に乘るなどの時は、シャペロン(附添老女)と同行するとを要す。

學科

午前八時、號鐘ひゞき、祈禱會を報ずれど、出席するとせざるとは自由なり。八時二十分過ぎに朝飯あり。

朝九時より十二時半迄、午后三時半より六時半迄、夜八時より十時迄を修學時間とす。此間は靜粛を要す、生徒中より撰擧せられたる者取締となり、治安を保護す。

午飯は不定時にて、十二時半より二時迄の間だ、自由に喫するとを得。又十二時半より三時半迄は、生徒遑き方に逍遙し、もしくはテニス、玉なげの遊びに群がる。

午后のテー(お八つの喫茶)は、二時より四時半迄の間にて、自らの室にて喫するもよし、又友を招くもよし。

午后三時半より六時半迄は、一日中最良の勉學時間とす。講義は大抵午前のうちにあり、遲くも一時二時にて了る。

學生は大抵一日六時間勉學す、多きは八時間の人もあり、又少なきは四五時間の人もあり。

夜食(ヂンナー)は、午后六時半にて、生徒一同會食するの定めなり、たとひ衣は更むるとを制せずと云へど、多くは皆な淸らかにして會す。着席は好むまゝにて宜し、仲よし同士隣るに可なり。但し、一方に高坐(ハイ、テーブル)と云ふ所ろあり、校長、副校長之に着席す、此に招かるゝは學生の譽れなりとす。

夜食の后ちは、さま〳〵の會あり、大なるもあり、小さきもあり、ブローニン、ソサイエテと云ふと最とも大なりとす、又音樂會もあり、討論會もあり、政事クラブもあり。

討論は一學期大抵二度あり、題は大率ね學理上に係れど、間ま實際なるもあり、或は云ふ、子供の育て方何如にと。

左に掲ぐるは、去る一年中の題なり。

一　流行の勢力は、道德上にも、智識上にも、美術上にも、社會上にも害惡ある事(四名の多數にて可決)。

二　人は自己の爲に名節を造るとを可とす(卅九名の多數にて可決)。

三　大改革を成就するには、一方に僻したる意見あるとを要す(四十六名の少數にて否決)。

四　多く考がえんが爲めには、少なく讀むべし(五十四名の少數にて否決)

かくて一年一回、ギルトン、ニウハム兩女子大學の間に競爭の討論あり、書生ども大に激昂す。

政治クラブは、冬の間は一週に一度集會す。總ての會の中ち尤とも隆盛なり。現今は保守分子多けれど、通常改進派は多數とす。右クラブの集まりは、一の小議院の躰裁にして、堂々論辨す。時間は午后七時より八時迄と定めあれど、論爭熾んにして、火の手中々に消えざるとあり。聽衆は、クラブの内閣と云ふ所ろより傍聽券を領し、入席す。

ニウハム女子大學よりは、各新聞社に直接に電信を架す。故に生徒は、翌る朝の新聞を讀まず、直ちに急報を知るとを得、之が爲めに學生が政治上に激するの席亦た格外に多きなり。かくて或る一夕例の政治討論ありし際み、飛電あり、カルツーム落ちぬと、此時の驚きは、名狀す可からずありき。

政治クラブの内閣員となるは、譽れあるとにて亦面白きとなり、内閣員の女秀才は議會開集中、毎夕毎夕國事の大問題に付きて考慮す。

一週一度、午后七八時の間に舞跕あり、最大の室を之に充つ。各生皆な大ひに之を好む。

又た音樂唱歌會あり、ドクトル、ダン氏之を導びき、各生面白く歌ふ、年に一二回大會を催ふし、客を招きて、玉を弄するの美音を奏す。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

批評

○近時政論考　井上次郎

陸實君の著とす、三宅君が序に引せる如く、陸君は眞とに此著の適任者たり、特に曰く、君子の其眞理を明かにせんとするや、其説の時に容れられざるを憂ひず、其理の世に誤解せらるゝを憂ふと、此主旨によりて遂に國權、國民、國粹などの論派の源淵由來する所ろを叙述し、筆剛毅、辨明らかにして、頗ぶる讀者を動かす。附錄「自由主義何如」の結末極めて重し、云く、自由主義は吾輩の單一なる神にあらず、吾輩の眼中には、干渉主義もあり、進歩主義もあり、保守主義もあり、平民主義もあり、貴族主義もありて。又。附錄、近時憲法考は、最とも價ひあり、能く日本憲法の成立進化を考窮せり。

○希望　撫象子

武市圖雄馬氏が著なり。湖處子が「歸省」に似て、彼よりは冗漫ならず、而して著想更に佳、文の奇氣に至りては彼に劣るものあり、要するに互ひに伯仲するものか。

構趣布置に至りては大ひに見るべきものあり、各篇題を更め、蘆山を十六の方面より觀察す、源泉混々として岐流横逸すれど、中に一派の清流つねに之に伴ふ。

諸名士すでに賞賛し盡せり。島田君は云ふ、胸中一點の奇想あくむば、才氣横溢の人と雖ども尚ほ苦境に此感念を發する能わずと。尾崎君は云ふ、經營慘憺、流暢富贍の文を以て之を發露すと。森田君は云ふ、著者、文の興に於ける既に三昧に入れりと。德富君は云ふ、文心靈活、措辭婉宕と。植村君は云ふ、其書に述る所、高尚なるものあり、靈氣爽然たるものあり、情味藹然たるものあり、皆な肺腑より湧き來ると。諸君すでに其長所を言ふことを盡せり。而して、人生の大希望に於て未だ盡さざるものあり、文に於て少や漫なる所あり、引例に於て少しく過る所ろあるが如きも亦た諸君之を直言せり。われは、兩面ともに之に同意す。

現今と見し眼前も忽ちに暗黒なる過去の世界に埋葬し、

右に類する文字まゝありと云へど、亦た、

嘗みに窓隙を窺へば夜柝呼び絶へて万象滅し唯微かに怪雲に吞まれ吐かれつ、急行する孤目の鐵窓に隱映するを見れ

ば夜情の漸やく深きを覺ふ何等の凄氣ぞ西隅に當て獰鬼の笑ひ且つ咳くを聞く少時にして躍り且つ舞ふを聽く是れ鐵蕉の動き棕櫚の相摩するなり。

など秀麗の措辭少なしとせず。われも亦た諸君と共に文壇に一才子を紹介するを樂しむ。

〇世界最大のもの

世界最大のものは何なりや、ヘンリ、ドラモンド氏は答へて愛なりと云ひ、哥林度前書十三章を、巧みに、麗らゝかに、説明し、嘗て學生の爲めに講述さる。横井時雄君、之を譯し警醒社より發兌す。男女ともに一讀して極めて價ひある書とす。

〇約翰傳證據論

同志社神學叢書の第一として、ラーネッド氏が講述に係る題號の小冊子出づ。約翰傳は、四福音書中の最大切要の品なり、之が確實を疑ふの論辨は、基督教に莫大の影響あらんとす。近ごろ特に其論辨きこゆ。此時に當り小冊子なりとも斯る勇猛なる證論の出づるは、斯教の爲め益なり。

寄書

荒砥なみ子

みや子姉は仙臺藩士柳内龜之進の長女にして慶應三年十二月二十八日陸前國玉造郡岩出山に生る明治五年藩主伊達家の北海道開拓に趣くや柳内氏も家族を舉けて石狩國石狩郡當別村に移住し姉も亦隨て還る後明治十六年五月荒砥氏に嫁し已にして良人と共に函館に到り姉はメソヂスト女學校に入る明治十七年十一月良人の大坂聖三一神學校に入るや姉は永生女學校に入り翌年二月主の召に應して宣教師ポール氏より受洗し聖三一教會員となる爾來信仰愈々增進し同九月監督ウヰリアム氏より堅信禮を受く明治十八年冬神戸英和女學校に轉學して以來姉は一層心を學業に用ひ日夜孜々として敢て倦怠するなし然るに不幸にも姉は其過度の勉强の爲め姉が此度就眠の原因なる耳病を醸され遂に廢學するの止を得さるに至り去て再び大坂に歸る時に明治廿一年九月なり後病少しく癒ゆるに及て良人と婦人月曜會を高津村に設立し姉は專ら編物等教授の任に當り頗る盡す所ろありき其他良人の出雲松江、伯耆境及ひ河内松原等へ傳道するや姉は恒に共に在つて大に其傳道を補け到る處として人に愛せられさるなし明治廿二年良人の神學校を卒業し福山教會を司牧せらるゝや姉も亦共に來つて傳道を補翼し熱心教會の婦人を奨勵し又婦人青年會の興る會員姉を推して會長となさんとす姉固く辭す遂に聽かずして其任に就けり爾來堪忍博愛の精神を會員の腦裏に注き以て該會の基礎を固くせり後幾くならすして會長を辭し然れとも姉は常に該會を補翼して病床に就かるゝまては編物等教授の勞を取れり該會の今日ある姉の盡力の結果に歸せさるを得す本年五月廿三日再ひ耳病を發して以來疾病日に加はり遂に化して性中耳炎に變し六月十七日午後九時二十余名の兄姉圍繞の中澹然として永眠に就かれたり

みや子姉は其性溫良にして謹愼語約にして毫も身邊を裝飾せす良人に對しては善く貞諒を盡し妻たるものゝ務を欠かす宜に合ふ衣にて飾り髮を編むこと、金と眞珠と價貴き衣を以て妝飾せす善行を以て飾とせり之れを要するに姉は信仰と愛と潔と謹に居り言葉よりも寧ろ行爲によつて主の榮光を顯せしと言ふべし可惜享年僅に廿有三歲六ヶ月其遺骸は地下に歸せり然りと雖姉の德行は永く吾人の記臆の中に存せり嗚呼みや子姉の如きは實によく婦德を守りたると云ふ可し河合氏三報

因に記すみや子姉は貴社女學雜誌の讀者にして其初號より今日まで恒に愛讀せられたる所ろなり且つ此每號は皆保存して姉の遺筐中に在り

〇われは住む何のために　香雪女史

われは住む、われを愛するものゝため、われをよく知るものゝため。
われは、わがうへに、笑へる天のため、わが魂を、まつ神のため。
われはわがたすけもとむる事のため、われはわがちからをたのむものゝため。
われはわが遠くへだゝる未來のため、わが爲し得べき善のために。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

曾我中將

新聞紙は報じて云く、曾我中將曾て皇太子殿下御養育主任たりし時より殿下御婚姻の事に關し大に憂慮する所ありて專ら其の取調を爲し居たるよし同中將は將來我國にても一夫一婦の制を採り殿下の妃となるべき資格を備ふる人を推し奉らんとて時々華族女學校に至り同校生徒に關して取調ぶる事杯ありしが其の後ち職を退きたるに拘はらず痛く此の事に心し右に關する一篇の意見を陛下に差出さんとて目下取調中とのとなり。何等誠眞の忠ぞ、吾黨臣民中將に心を合せて、日夜祈願せずんばある可らず。

海外の醜業女

果して吾人が言ふ所ろに同じく、米國に於ける近頃ろの大評判は、愛見蘭人が特に煽動する勞力上の問題に關すると多し。近時の確報いよ〳〵之を確かむ。故に益々信ず、海外の數百の醜業女に驚ろかんより先づ國內の公娼を全廢せよ。此天皇陛下が治しめす御稜威の直接の下に、一夫一婦の制をして明らかならしめよ。然らば何ぞ瑣々たる評判を恐れん。

問答

可愛子

●問。私に本年五歳と、一歳の子供がありますが、五歳の子に、ヒマ〳〵話して聞かせるようなよき本があらば、數へて下さいまし。（廣嶋ひで女）。●答。女學雜誌社から出ます「子供の談」といふ本がよろしう御座いませう。

●問。頭にフケの出來ぬやうになる藥がありますか。、佐賀縣松軒生）。●答。マダそういふ藥のあるとは聞きません、けれど、フケの出來る時は、度々しやぼんか何かで、よく洗ひ、淸潔にしますと、アマリ出來ぬようになるとの事です。

●問。輕病に罹りし時の、簡便な療法の書いた本がありますか。（安川瀧子）。

●答。「醫師の來る迄」といふ本や、「民間救急醫法」といふ本などが、宜しからうと思ひます、日本橋馬喰町の書肆嶋村か、日本橋通りの丸善などにありませう。

●問。和歌の本古今集は、何れの書店にありますか、又代價は何程位のものですか。（根岸愛讀女）。●答。東京の大槪の書林にあります、價は注解のないのなら二十錢位、注解のあるのなら五十錢位であります。

●問。私の妹が今度結婚しますが、それに就て何か贈り物を致したう御座いますが、假名附きの本で、何かよい本がありませうか。（在麴町區東北寒生）。●答。女學雜誌社から出ます木村鐙子の傳、其他子供の談、子育て草、西洋女禮など宜しからうと思ひます。

●問。貴社の通信女學は、私の妹の如き田舍住居の者にも、解りませうか。（在麴町區東北寒生）。●答。平假名附きで、文字が極く平易な講義躰でありますから、ドナタにも解ります。

●問。私の父は不信者ですが、平生弊の事を嫌ふにも係はらず、基督教が非常に嫌ひで、敎理のとを首はうとすれば、頭から叱り付けられ、壓制を以て信仰を奪はうとします、偶像の祭禮の客などに、無理に代理をさせらろゝには、實に困まり入ります、私はたゞ基督教の大躰を害はぬとは、大躰默從し、常に上帝に父の改悔を祈るばかりですが、如何致したらば、父が悔改める樣になりませうか。（南海漁夫）。●答。祈禱は、ナヘリ斷へずに、信じてなさるがよろしう御座います、誰か其子のパンを求むるに石を與ふるものがありませう、信じて祈らば、必らず聖驗の顯がありまず、且つ傳道とは、口で說くばかりでなく、行でも、思でも、立派ならば、すべて大なる傳道です、眞に立派な人物とならば、無言の間にもよく人を化するとが出來ると思ひます、畢竟私共の信仰と望と愛を高く、大きく、篤くするのが、第一の傳道です、ヒリピ書に「なんぢら基督の心を以て心とすべし」とあります、私共日頃甚だ足らざるとを感じます、ドウか主にある者は益々勵み勵まされて進みたく思ひます。

女報

可愛子編

●皇后陛下の御容體　皇后陛下には、過日芝離宮へ移らせ給ひしより、追々御快方に赴かせらるゝ由、昨今御附きの人々は、多くの漁夫をして網打及び釣漁を催して、御心を慰め奉り居れりと承る。

●行啓　皇后陛下御機嫌伺ひとして皇太子殿下には去る一日、芝離宮へ行啓あらせられたり。

●芝公園共立幼稚園及び保姆講習所　昨年の末以來外山正一、神田乃武、元良勇次郎、東京女子師範學校卒業生田中房子の四氏に托し、保育上漸次改良を加へ居れる同幼稚園は、現在の幼稚生七十名に及び、本月よりは今年四才にならせ玉ふ北白川成久王殿下、及び三歳にならせらるゝ貞子女王殿下の御入園相成る趣にて、府下私立幼稚園中隆盛のものを問へば第一に指を屈せらるゝに至れりと、又同園内東京府教育會保姆講習所にては、去る一日より三日間生徒の卒業試驗を行ひ、十日芝彌生館にて證書授與式を執行したり。

●成立學舍女子部　は今度神田三崎町二丁目十二番地に移轉したり。

●東京音樂學校　は今日卒業證書授與式。

●東京レース製造所　日吉町なる同所にては、近來海外より續々注文あり、且つ去月二十七日卒業試驗に及第せしものありて、欠員を生じたるに由り、今回大に生徒を募集する由。

●露國皇太子の寄附　露國皇太子殿下は、東京盲啞學校へ金五百圓を寄附せられたるに就き、同校にては之を學校資金の內に加へ、其利子を以て生徒の療養費に充つることゝ爲したるよし。

●幼女の能書　日本橋區傳馬町二丁目の筆司香雲堂の季女山岸多年子は、巖谷一六氏の門に入りて未だ日あらず、今年僅に七歲にして頗る書を善くし、其最も得たる所は行書にありといふ、尾崎紅葉氏の書齋の扁額に「新元祿」の三字を認したるごとき、筆力勁健男子も及び難きの妙あり、此の事いつか世間に傳唱し、近頃は貴紳の席へ招かれて揮毫見物の諸人舌を卷て驚かざるはなしといふ。

●一年三百六十五日無休刊　と初めて唱へ行ひたる時事新報も、今度改正して日曜を休むとなり、國民新聞も亦同じく休めり、吾人は之を喜ぶ者なり。

●禁酒演說　英人アランド氏は去る四日午後七時、根本正氏の通譯を以て、一番町教會に於て禁酒演說を爲せり。

●安藤太郎氏　は去る三日、外務書記官に任じ、奏任一等に叙せられ、上級俸を下賜せらる。

●畠山勇子の義捐募集　勇子の爲めに義捐を募り、其金を憐れなる遺族に贈與し、併せて一碑を建立して、其節義を後世に傳へんと企つるものは、成山金吾、長松丹治外三氏にて、事務所は麴町區飯田町五丁目四十番地にあり、義捐金の締切は七月卅日迄との事なり。

●畠山勇子の追善供養　來る十二日下京區松原通り大宮西入末慶寺に於て、畠山勇子の追善供養を行はんとて、目下夫れ〳〵準備中の矢先へ、東京にても成田金吾氏等、同志者數名と謀りて同地に勇子の紀念碑を建て、倘勇子の叔父榎本六兵衞氏に說て、勇子の死骸を東京に持歸り改葬せんとのことを相談し、其旨京都へ申來りたる處、末慶寺に於ては大に驚き早速有志者と協議の末、仔細ありて死骸引渡しの儀は承知し難しと答へたる由、又た追善供養の當日、勇子の遺品を陳列して衆人の觀覽に供したしとて、彼の血痕ある衣類剃刀等借用の儀を上京區役所に願出たるも、聞屆なきにより、幸に同女が車夫に與へたる饅頭笠を買入れ、遺物として永く同寺に保存する積りなりといふ。

●フェリス和英女學校の卒業式　橫濱山手百七十八番フェリス和英女學校にては、去る七日卒業式を執行り。

●フレンド女會の寄附金　京都同志社新嶋紳學館寄附金は內國にて既に三百餘金に達せしが、此度米國フレンド女會より五百弗(六百四十圓)の寄附金ありし由。

●ホワイト女史　京都同志社女學校教師なる同女史は、病氣保養の爲め歸國せらるゝとて、六月二十六日同校內に送別會ありたり。

●婚姻式　同志社教授下村孝太郎氏と北垣さく女の婚姻式は六月廿七日夜京都常盤ホテルにて擧行せらる。

●同志社女學校卒業式の時　新嶋未亡人、松山、海老名、中嶋令夫人、女學校助教授等、皆一樣に赤前掛にて、接待に執掌せられたりといふ。

●婦人友愛會第一集會　は本月四日、大坂中の嶋一丁目大坂婦人慈善會事務所に開きたり、又同會より出る雜誌は既に六號に至れり、溪流女史の筆、見るべきものあり。

●赤十字幻燈會　六月二十九日、石黑軍醫總監、官務を以て大坂滯在中、日本赤十字社大坂支部員は、請ふて同地朝日坐に於て、赤十字幻燈會を催されたり。

●廢娼論　茨城縣水戶市には昨年一度廢娼論の起りし事ありしが、故ありて中止之姿となり居たり、然る處去月來神奈川縣より佐々木笑受郎氏の來水されしより、再び火氣を生じ、盛に運動せん模樣ありて、目下市內の有志者は東西に奔走して、運動費募集中之由、又其贊成者中には縣會議員中稍々の聞ある、野上球平氏其他市內有力者少なからず、近日中其第一着步として、廢娼大演說會を催すとの事。

●基督教と水戶婦人　水戶市內基督教徒の數は、各派合せて百名に垂んとする程なるに、其內婦人は只僅かに三四名耳なり、其理由は種々あるべきが、兎角婦人が教會抔に出づれば、市內狹き爲め人目に觸れ易く、譏に評判高くなり、市中を步めば誹らるゝを厭ふ爲なりと。

●山梨英和女學校の新築　仝校は今般縣廳西の空地を購求し、去る四日より新築

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

工事に着手し、九月十四日迄に工事を落成せしむる豫定にて、同月廿日開校式を執行する都合なりといへり。

●鳥取英和女學校第一回卒業式　は六月十三日擧行せらる、卒業生は本科、本邦科、裁縫科を合せて九名。

●遊廓移轉延期の請願　相州横須賀大瀧町の遊廓は、町家に接近し不都合少からずとて、先きに縣廳より廓地移轉を命ぜられしが、貸座敷營業者は種々の事情を申立て手を換へ品をかへ据へ置き、換地、延期と再三再四出願したれども聞届けられず居りしが、移轉期限は愈六月三十日限なるも未だ移轉の準備は調ざるに依り、三浦郡撰出の議員古谷正橘、永嶋庄兵衛氏等は、六月廿九日内海知事に面會し、向ふ三週間の延期を出願し漸く聞届けになりしと云ふ。

●奇怪なる學校　さして將て通信ありたる廣嶋女學校は、藝娼妓に教ゆる所なるが、先日以來校長と教員の間に不和を生じ、袖を連れて辭職し、生徒は日に月に減少する傾あり、同校維持の經費は、俗に所謂線香料てふものにして、之を以て習業料等に宛つ、道路の風説によれば、一ヶ年の收入殆んど千餘圓なり、而して其金は學校の維持費とはならずして、或る一部の人が自家の商業に使用する者なりと、然らば藝娼妓の教育てふとは第二の手にして、學校を以て商店と見なしたるものか、噫何等の怪事ぞ、堂々たる明治の御代に此風聞を流す、吾人は一日も早く輿論が此醜業者を驅除するとを望むと、通信者はいへり、因に云ふ同縣下は關西に於て甚だ風俗の紊れたる中なりと。

●廣嶋縣下の女學生　は目下追々增加するといふ。

●廣嶋英和女學校　に於ては六月三十日第一回卒業證書授與式、並に閉校式を執行し、普通科卒業生、錦織ゆき子、岡かづ子、山田はつ子、奈古ゆた子四名に證書を授與せり、同校生徒は、目下附屬小學科を合して五十名あり、其漸次其數を增さんとす。

●防長婦人相愛會第三十八常會　は五月十七日開かれたり。

●弔詞　私立防長女子教育協會の名譽會員岩淵參事官の夫人死去せられたるに付き、同會より弔詞を贈りたりと。

●長谷川きた子　越後國高田女學校教師たる同女史は、暑中休暇の爲め歸京するに付き、六月二十六日同校講堂に於て送別會を開きぬ。

●高田女學校の文學會　は六月二十七日開けり。

●婦人矯風會の移轉　岩手縣盛岡なる會事務所は是れ迄上衆小路十八番戸に設け置きしが、先程河原小路三浦徹方へ移し、會員奮發して事業を擴張すると云ふ。

●婦人進德會　盛岡の同會は、昨年六月創設せられ、毎月三四回佛教僧侶を請じて說教を開き、且つ挿花茶の湯及禮式を平野濟芳氏に學び居る由にて、先頃市外米內村願教寺に於て開會し、會員六七十名の來會者ありたり。

●賞狀下付　岩手縣盛岡市の醫師江刺家宗城氏は、市內各小學校生徒並に無資力者の兒童凡そ二千八百四十六人程へ無料にて種痘を施せし段奇特なりとて、縣廳より賞狀下付せらる。

●婦人修風會　高知縣土佐山の同會は、追々盛大に赴くといふ。

●福井縣下に於ては　去る四月尋常師範學校女子部の閉鎖せられし以來、女子教育を授くる所は、現今尋常中學校女子部の設けあるのみなりと。

●福井婦人會　は去る明治廿二年十二月の創立にて、會頭には縣知事安達氏の夫人はま子、副會頭には尋常師範學校教員根本しか子、會員目下七十名許、毎月二回、會員及び師範中學の兩校教員を聘して女子教育に關する講談を開く。

●元を糺せば一女子の發明(屋根板絣)　筑後久留米絣の中一番多く輸出する、屋根板飛白の起源を聞くに、今は昔弘化三年筑後上妻郡國武村に、手島太七てふ人ありて、妻なのし子と云ふ、のし子中々利巧者、大に機業を好む、或る日の事なり、のし子は何の氣なしに煤の爲め眞ッ黑となりたる蒲薦の繩を解きたるに、繩の痕眞ッ白なるを見、頻に思案し研究し、試みに綿糸を延へ、針にて緯を編み、直に藍汁に浸し置き、後に至り編糸を解き買藏せしに、糸の痕點々眞ッ白なること、恰も蒲薦の結繩に於るが如し、のし子は即ち之れを機業に移し、普通織方にて試織せしに、果して骨折り甲斐あり、緻密なる細小の飛白を織成せりとなん。(讀賣新聞)。

●婦人禁酒雜誌　米國並に萬國婦人禁酒會機關雜誌ユニオン、シクナル五月十四日發行の分には、同會々頭を始め諸役員、及び各國支部役員の肖像を、精密なる木版に彫刻印刷せり、其中には東京婦人矯風會々頭淺井さく、竹尾こと兩氏もあり。同號の雜誌は二十萬部を印刷せりと。

●アッケルマン孃　は濠太利亞洲に於て演說したり、印度の諸邦にては頻に孃の來遊を乞ひ、亞非利加にても同様孃を迎へんと熱望し居る由。

●スマトラ島に於ける夫婦の關係　同島に於ては、夫は其の婦を富ましむるを以て平生の目的と爲せり、一男一婦を有し、一婦亦一夫を有す、而して此の夫婦間には道德充分に行はれて其生活の樣如何にも愉快らしい、モハメット宗の教義は、夫婦離婚の問題上にも行はれ、夫は己れの意に從ひて其婦を離婚するの權利を有するも、婦の所有物は離婚の後も彼れの所有たらしめざる可からず、但し離婚は人口の割合には甚だ少なくして、之れをカリフホルニヤに於ける離婚の數に比較せば、十六に對する一の割合にも至らずといへり。

◎正誤　前號の紙上に「釋雲照律師が華族女學校に法話をなす云々」と記載せしが右は全く誤聞なれば、取敢へず正誤す。

週報

●政治　六月二十七日發行の活世界停止せらる●七月一日中正日報發行停止●三日內閣會議●四日自由黨政談演說會彌生館に開く●同日改進黨演說會厚生館に開く●五日板垣伯山形縣安田小出荒砥町に政談演說せらる。

●業報　六月三十日高嶋炭坑暴水漲溢●同日油撼斯德築港式。

明治女學校資義捐

音樂會收支報告

○第一項　切符賣上收入

券種	賣高枚數	枚數合計	賣上金高	收入合計
西洋券	七一枚	一二七六、五枚人	七一、〇〇〇圓	九一九、二五〇
和上等券	四九一		四九一、〇〇〇	
和並券	七一四、五		三五七、二五〇	

○第二項　特別寄附金收入

寄附人名	金高
佐々木豊子	一、〇〇〇圓
海老名りん子	、五〇〇
横濱 好學雜誌社	三、〇〇〇
女學雜誌社	一〇、〇八〇
伊澤修二氏	二、〇〇〇
増田増藏氏	二七、〇〇〇
横濱 中村房次郎氏	三、〇〇〇
同 星野愼之助氏	二五、〇〇〇
ハリス氏	一、四〇〇
武林盛一氏	三、〇〇〇
佐野御隱居	一、〇〇〇
波多野房子	一、〇〇〇
河村裕子	四、〇〇〇
尺きく子	一五、〇〇〇
飯野吉三郎氏	一、〇〇〇
合計	九七、九八〇

○第三項　出費

費目	金高
入場券印刷代	九、三六〇圓
委員奔走人力代	三二、二八〇
音樂師人力代	一一、六五〇
當日器具修繕費	、八〇〇
當日ピアノ椅子運搬費	一一、七九〇
當日委員食物代	二、〇五〇
當日音樂師食物代	四、一〇〇
廣告費	一三、一二〇
帝國ホテル席料寸志	二〇、〇〇〇
氷水	六、〇〇〇
下足料	五、〇〇〇
ヲルガン、貸室、上敷物	五、〇〇〇
布團損料	二、〇〇〇
置舞臺禮金	五、〇〇〇
上下右運搬料	二、〇〇〇
帝國ホテルニテ臨時雇人員六人	、七〇〇
當日雜費	一、〇五〇
狂言師裝束料并人力代	四、五〇〇
山勢外諸氏へ謝禮并人力代	一一、五〇〇
三遊亭圓朝氏へ謝禮	二、〇〇〇
薩摩琵琶田原元尙氏謝禮	二、〇〇〇
合計	一五一、九〇〇

○第四項　通計

入	切符賣高	九一九、二五
	寄附金高	九七、九八
出		一五一、九〇
殘		七六七、三五
殘金及寄附金合計殘		八六五、三三

以上

右殘金七百六十七圓、三十五錢並ニ特別寄附金九十七圓、九十八錢を合せ通じて八百六十五圓三十三錢を明治女學校へ義捐致候單へに贊成員の諸君並に數多の志を同ふする諸兄姉が御助力一方ならざるによりて此好結果を奏し侍り妹等が幸は言ふに及ばず明治女學校の幸福之に過ぎずと存じ右御知らせ申上兼て篤く御禮申述候かしこ。

明治二十四年七月一日

發起人　島田まさ子　田口つる子　木村はな子

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

再開業

特に女學生諸君の爲に別室を準備し且つ特待治療す。

下谷西黒門町 (女醫) 荻野ぎん子

外神田松永町 渡邊泰

專門

梅毒 痔疾 子宮 痳疾

右四科ハ院長が前の大學東校梅毒院勤務中只管該患者に施療したる處にして速に全治受合なり若し全治せざれバ藥價返却す●但し診察無料

京橋銀座二丁目東仲通 畑中堂

山本醫院

英語女生徒募集

各科共夏期試驗終敎科書ノ改撰且暑中休暇廢七月一日以降女學ノ別科ヲ設ケ從午後五時至六時特ニ敎授月謝ハ五拾錢但敎師日本語ニ通ル純粹ノ英國婦人ナリ

築地三十三番 歐文正鵠學館

文部大臣子爵榎本武揚公題字
大學院醫學士三島通良先生著

増補訂正 第二版

皇后宮御覽

はゝのつとめ

親の卷 妊婦産婦の心得 定價金三十錢(郵稅二錢)

子の卷 日本育兒法 定價金四十五錢(郵稅四錢)

右は我國無双との好評を博したる日本母子衛生書なり今般増補訂正の上再版したり醫科大學産科婦人科小兒科病室幷に群馬縣高等小學其他諸女學校に於て參考書又は用書として使用するところ少からず

書肆 通三丁目丸善。表神保町中西屋。馬喰町島利。春木町島利支店。通擴町中央堂。

下六番町 女學雜誌社

女學生

第十四號

女學雜誌社 發行

每月一回發兌●一冊郵稅共六錢

女學生

武道の化育 …… 星野愼

まとひの莚

旅上母を想ふ …… 暗光子
春日の局 …… 天知子
靑天の鳥 …… 可愛子
讀書の流儀 …… 假名子
祈禱、感謝 …… 川合信水
笑ふ者よ哀む者よ、○エホバの閫ろ …… 方寸子
客窓書感 …… 末次
詩人の困難 …… 詩軒
輕跳去れよ …… 野雄

睦びの家

普通學の必要(上卷) (頌榮女學校) …… 德澤くす子
孝せばや (東洋英和女學校) …… 宮川すみ子
山上の殿 (女子神學校) …… 中谷早稻子
寸陰を惜むべし (同 上) …… 松本錦子
醜女子 (女子學院) …… 秋野女史郎
新樹を見る (東洋英和女學校) …… 丹羽環子
古の文を見て (同 上) …… 吉田ひろ子
現今我邦に要する婦人 (立敎女學校) …… 堀塲いさ子

寄せぶみ

臥牛山に登るの記 (函館女學校) …… 根本松世
愛、我を勵ませり …… 櫻水子
明治女學校音樂會に薙刀術を見て …… のぶ

昔ばなし

述懷 …… 不二山人

女學生全盟各女學校は左の如し

○明治女學校○女子學院○新榮女學校○女子神學校○共立女學校○フエリス和英女學校○頌榮女學校○跡見女學校○立敎女學校○成立舍女子部○女子獨立學校○海岸女學校○長榮女塾○東洋英和女學校○靑山英和女學校○金城女學校○高田女學校

緒方高橋兩病院長保證ノ特効藥

登録商標

大醫 緒方惟準 高橋正純 両先生ヨリ寄贈ノ有効證状附◎

宮本 子宮丸 定價 三ふくろ金五錢 十ぷくろ金十五錢 一まろう金卅錢 二まろう金五十錢

まへよれる 子宮綿 定價 六ッ入金五錢 十五入金十錢 六十入金卅錢 百廿入金五十錢

◎宮本子宮丸……は悪臭あし疳高く氣鬱し逆上頭痛熱いで嘔氣嘔吐胸背痛み子宮痛動悸高く手足腰緩痛或は痲痺れ下腹に球でき痛むヒステリー症方言子宮ちの道神經症を治す

●子宮綿……は子宮歪の誘因となる子宮膣の炎症たゞれを治す効あり故に平常しのび紙の代用とすれは子宮病しらずの健康躰となる

(注意)子宮患者は宮本子宮丸を内服し子宮綿を兼用すれば奏効一層速なり

本家 大坂清水町 心齋橋筋東 吉村龜壽堂 東京日本橋西中通上橋町三番地

關東發賣元 萬金膏安川榮次郎

◎取次販賣所ハ各地有名ノ藥舗及賣藥店ナリ

龜壽堂主人吉村氏ノ製造スル宮本子宮丸及子宮綿ハ醫士宮本龜壽氏ノ所定ニ〆其處方及製法ノ適否ヲ撿定スルニ予ガ意見ニ投合ス依テ其有効ナルベキヲ信ズ

明治廿三年十月 緒方病院長正五位勳三等 緒方惟準㊞

醫士宮本龜壽氏ノ經驗方劑ニ係ル宮本子宮丸及子宮綿ハ龜壽堂主人吉村氏ノ製劑ニシテ處方製法兩者共宜シキヲ得各般ノ子宮病ニ實効アルモノト信認ス

明治廿年十一月 高橋病院長從六位 高橋正純㊞

縮毛直 一箱三十錢

白毛即座染一箱二十錢

髮洗草ゝ 一箱六錢

キへー水 一瓶十錢

百歳の美少年

滿天下の好評を得たる神田帝國堂の白髮染並にちゞれけ直し等は其効の著しき事は皆樣も既に御承知の事なるが今般弊堂に於て諸君の御便利を謀り該妙藥を以て白毛染ちゞれ毛直しの依賴に應ぜんとす希くは御入來の上御ためしあらんことを

(注意)該染法に從來有ふれの十二時間手拭かぶりむす等手數なく(油氣のあるも妨なし)二十分間にて美事に染り一生はげぬ請合の妙法あり万一無効なれば代金返戻の上相當の謝金を呈す

◎御入來の暇なき人に限りはがきにて申込候へば直に罷出染直し可仕候

東京下谷仲御徒町三丁目四十三番地

大販賣所 染 帝國堂村上

夏日の好伴侶

農學士。寺尾熊三君著

植物學

一冊五十頁

定價金十二錢

百花咲ひ、胡蝶すら之に戯むれ遊ばんとす、人や須からく其美妙を研究し、天地の至能を歎賞すべし、此書、植物學を尤とも平易に、尤とも分り易く解明す、今の時に際して、容易く草木一汎の妙理を悟るに至極の好方便を與ふ。定價僅かに十二錢に過ぎず。

女學雜誌社出版部

家庭廉價 女學書類發行　女學雜誌社編輯

子供の談　紙數八十葉　郵稅なし　定價十二錢

右は子供の爲にある好きお話にて、母親が盲ひ聞かすに結構なる材料なり。第一、田舍音樂師。第二、望の君、第三、熊と旅人。第四、風と日の喧嘩。第五、ハイ〳〵とダマイマ。第六、カンとクッド。第七、王にも勝てる人々。第八、母の愛。第九、柔順なる娘。第十、英雄の所業。第十一、ましき兄妹。第十二、正直な樵夫。第十三、慾婆。第十四、忠義の家來二人。第十五、不思議の新衣裳。第十六、小娘とガマ。第十七、尤も惡き所行。第十八、正直なる小娘。

西洋女禮　紙數六十七葉　郵稅なし　定價十二錢

右は、婦人紹介の事。婦人書面紹介の事。婦人訪問名刺の事。婦人會話の事。婦人案内の事。散步、かざり、宴會の事。食卓上の心得の事。婚姻の事。客を遇する事などに分ち、西洋貴婦人の心得を一と通り平易に解明したり。

女子生理　紙數百九十葉　郵稅なし　定價廿五錢

右は、月經の事。懷姙の事。分娩の事。の三つに分ちて、くはしく女の生理の事を說き。且つ長谷川泰氏が婦人病の元因、村岡範爲馳氏が眼鏡の話と云へる二つの論を附錄としたるもの也。

和畫案内　紙數百廿葉　郵稅なし　定價五　錢

右は八木兼辰氏の講述にかゝるものなり

兒育て草　紙數百六十葉　郵稅なし　定價二十錢

右は育兒の心得を問答躰にして、人の氣のつかぬ細かなる事迄て一々說明し、母として子を育つる總ての心得を悉とく講述したり。

邦文學　紙數百六十葉　郵稅なし　定價二十錢

右は同志社教師松山高吉君が講述にして、和文躰の文法、格を、極めて細密に說明したるもの也。

女學雜誌社出版書目

鈴木弘恭大人述	つれ〴〵草講義	一冊	價金八錢
鈴木弘恭大人述	文法口授	一冊	同十六錢
鈴木弘恭大人述	百人一首講義	一冊	同三十五錢
船越鄉太郎君著	産婦小兒攝生法	一冊	同十六錢
關輪正路君纂	ひめ鑑	一冊	同四十五錢
中島俊子著	善惡之岐	一冊	同卅五錢
横山雅男君著	婚姻論	一冊	同十六錢
島田三郎、植木枝盛兩君演說	廢娼演說	一冊	同五錢
巖本善治述	妓樓全廢	一冊	同五錢
島田三郎、巖本善治同著	公娼可滅	一冊	同五錢
農學士寺尾熊三著	植物學	一冊	同十二錢
林學生星野愼著	昆虫植物金石採集法	一冊	同十錢
明治女學校教師八木兼辰著	和書手本	四冊	同一圓
女學雜誌社編輯	演說著作材料	八冊	同四十錢
巖本善治著	鉛子小傳	一冊	同八錢

下六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

品名	九月七日
白米(一円ニ付) 一等米	九升八合
二等米	一〇〇
三等米	一〇四
四等米	一〇九
五等米	一一四
正米(一円ニ付) 越後米	一四四
美濃米	一四三
尾張米	一四一
忍領米	一三五
庄内米	一四六
雜穀(一円ニ付) 本貫大麥	三三〇
上州小麥	二〇〇
竹林麥	一七五
梅澤大豆	二一〇
青柳大豆	一九二
吟小豆	一五〇
白胡麻	一三五
黑胡麻	一五〇
鹽(一円ニ付) 赤穗	三、四五
大鹽	三、五五
本齋	五、七〇
新齋	六、四〇
醬油(一円ニ付) 最上・極上・上物・中物・並物	七九 八五 八九 一、一五 一、三三 一、六五 一、八五 二、一〇 二、二〇 二、五〇
味噌(一円ニ付) 地製上白	七、〇〇
同上赤	七、〇〇
同紅赤	五、〇〇

品名	九月七日
絹糸(一箱ニ付) 本練花色	二三五
色物	二三五
赤白	二三五
延糸	二〇五
芥子糸	二四五
薄色	二三〇
色物太練	二四五
羽二重糸	二四〇
生黑羽二重	四五〇
極天上色物	二二五
紡績器械糸	四一〇
白木綿(一円ニ付) 玉鶴	三、五〇
綾鶴	三、八〇
日ノ出鶴	四、一〇
若柳	三、二五
稲岡	三、四五
蓬莱	三、九〇
古新	三、二二
改メ	三、五八
間銘	三、八〇
木綿夏織物(一個ニ付) 伊勢改良縞	五六 七〇
同糸入縞	九〇 一、〇八
笠井糸入縞	八〇 九九
佐織鼠縞	三七 五六
同辨慶縞	三八 四九
生機鼠絣	三〇 四〇
玉井正紺絣	八〇 九〇
佐々縞	一、二五 一、四〇
物産縞	四四 七三
糸入愛國縞	七〇 一、一〇
大和白絣	三八 六〇
伊豫絣	七〇 九〇
養老絞	三七 六六

品名	九月七日
製茶(一貫目ニ付) 山城江州稀大頭	二、七〇
同稀頭	二、三五
同大頭	二、〇五
同中頭	一、六五
同中茶	一、二五
狹山稀大頭	一、九八
同稀頭	一、六〇
同大頭	一、三〇
同中頭	一、二〇
同中茶	九〇
鰹節(十貫目ニ付) 薩摩大	一六、〇〇
伊豆上	一九、〇〇
城の腰上	一七、五〇
遠州上	一七、〇〇
銚子節	一〇、五〇
土佐大	一〇、〇〇
薪(一円ニ付) 鹿島出堅木	五三 六三
雜木	八〇 九〇
野州堅木	一八 二一
曾根大東	二四 二九
雜木大東	二六 三四
水油(一樽ニ付) 地水	六、七五
胡麻	九、三〇
荏油	一〇、〇〇
桐油	六、七〇
綿油	七、八三
坂水	七、八五
石油(一箱ニ付) チヤスター	一、六六
デボース	一、六六
ホーキ	一、六八
ロシヤ	一、六〇

面接日 木金兩日 后四時下(於社ニテ) 巖本善治

むし類 木の葉 石るゐ

採集法

右ハ星野愼之輔君が農科大學ニ於て實地研究より得たる簡便の採り方なり歸省の人、漫遊の人、庭園ニ遊ぶの人此一冊を携えて夏期の暇ニ實地觀察の學問を怠る勿れ

女學雜誌社

賣價十錢 郵便切手一割增し 郵送賃二錢

畠山勇子

を推窮して、細かに其皮肉を窺ひたる社說は女學雜誌第二百六十八號にあり之に續き其次號に於て、

自殺論

西京に自殺したる一女子が性格を評論し、其玆に至りたる因緣を揭げ、自殺に三種あるとを說きて之を痛論したり。

廣告定價

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右錄誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行(廿七字詰) 一回 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す慈善上の事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

雜誌定價

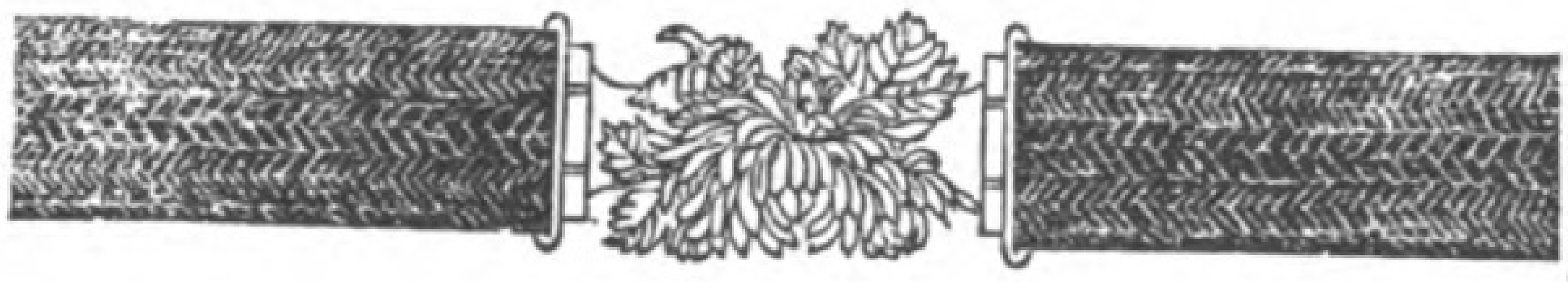
一冊。六錢 郵稅。五厘(但府內無郵稅)
十冊。五拾八錢 郵稅。五錢(同前)
半年分 壹圓四拾六錢 府外は壹圓五拾六錢
一年分 貳圓六拾錢 府外は貳圓八拾六錢

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

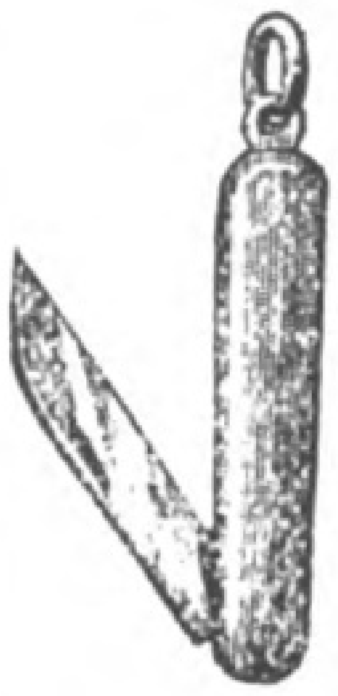
Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

●金製貴婦人持時計鎖 甲價四拾五圓●乙價三拾五圓半●丙價二拾七圓●丁價二十圓●戊價拾五圓半●己價九圓



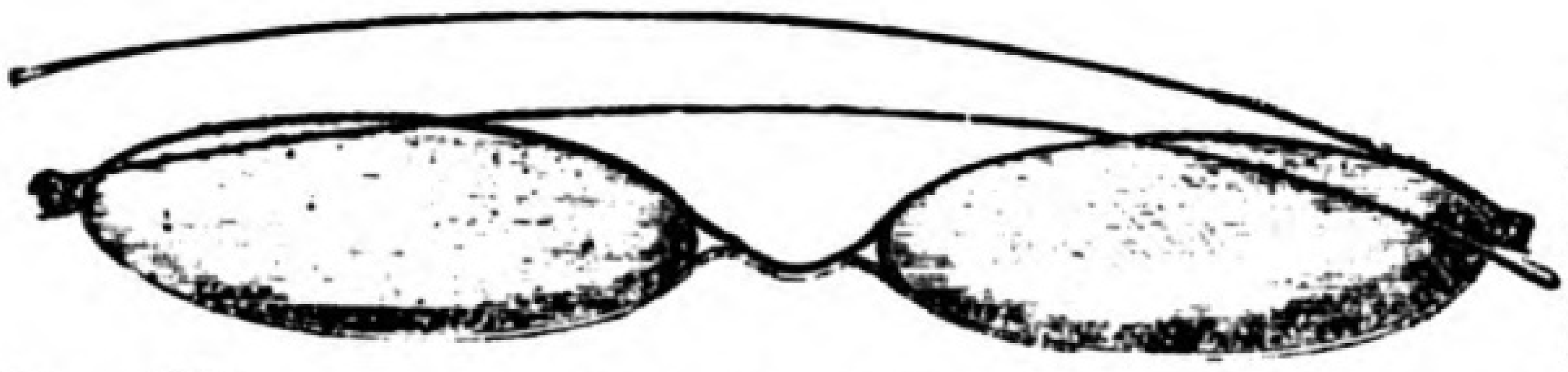
●金製貴婦人用帯留 甲價拾七圓半●乙價十三圓半●丙價十一圓●丁價七圓半●仝（鑛金）價五圓●三圓半●二圓半●仝金製寳石入甲價三拾七圓●乙價二拾九圓●丙價二拾一圓半●丁價十五圓



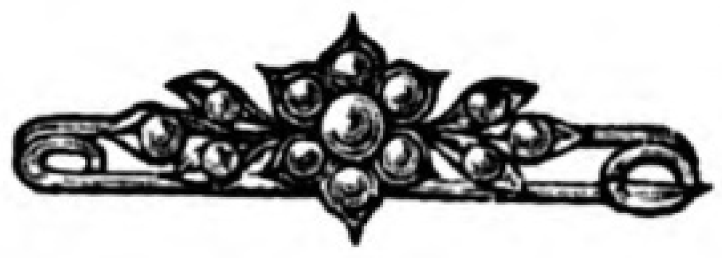
●金ナイフ 甲價拾五圓半●乙價拾三圓●丙價九圓半●丁價七圓●戊價五圓半●己價四圓

●金製寫眞入 甲價三十五圓●乙價二拾七圓半●丙價二拾一圓半●丁價拾五圓●戊價拾圓半●己價七圓半●仝磁石付甲價三拾九圓●乙價三拾圓●丙價二拾五圓半●丁價拾七圓半●戊價拾二圓半●己價七圓半

●金鉛筆 甲價二拾五圓半●乙價二十一圓●丙價拾七圓●丁價拾五圓●戊價拾壹圓半●己價七圓
●仝金着五圓半●三圓●二圓半●一圓六拾錢



●金縁眼鏡 甲價拾五圓半●乙價拾三圓●丙價拾壹圓●丁價九圓●戊價七圓半●己價五圓半●仝（銀縁）價五圓半●價三圓半●價二圓半●價壹圓半



●金製ブローチ 甲價二拾三圓●乙價拾九圓半●丙價拾七圓●丁價拾三圓半●戊價九圓●己價五圓半

●金製ピン 甲價拾九圓●乙價拾五圓半●丙價拾二圓半●丁價拾圓●戊價七圓●己價四圓半

●金銀時計各種●金製指環寶石入及見留印付各種●印材各種●篆刻應貴囑

●此他貴金屬及寶石入細工物隨御好調進仕候

東京京橋區尾張町二丁目拾八番地
●電話三百三拾三番

天賞堂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY